SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

三島市中島上舞台・安久遺跡出土土器の作製地について：胎土中の砂粒鉱物から見た

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-07-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 増島, 淳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025428

静岡地学　第60号（1989）

三島市中島上舞台・安久遺跡出土土器の作製地について
—胎土中の砂粒鉱物から見た—

増　島　　淳*

1．目　　的

中島上舞台遺跡（古墳時代）・安久遺跡（弥生～古墳時代）の両遺跡から出土した土器について、その胎土中に含まれている砂粒鉱物の組成や特徴から、作製地を推定する事を目的とした。

2．方　　法

試料土器は、市教委の発掘担当者から提供されたものである（土器の型式、時代も担当者のご教示による）。試料は粉砕後、塩酸にてクリーニングし、フルイ分けし、105～250 μm の粒子を検鏡試料とした。検鏡は重鉱物を中心に、1試料につき重鉱物200粒を鑑定するまでを目安として行った。

3．結　　果

A．遺跡の位置（図1）

両遺跡は黄瀬川の作る扇状地の末端部と、狩野川沖積地の接する所に位置する。この近辺は、最近まで狩野川の洪水を度々被った地域である。

図1　遺跡の位置

B．中島上舞台遺跡の分析結果。（図2）

分析した土器試料は30個体で、全て古墳時代のものである。これらを

*県立伊豆中央高等学校

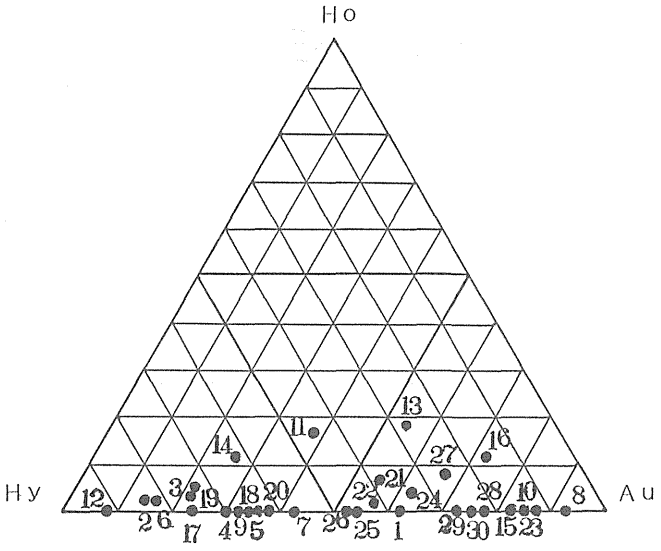

図２　中島上舞台遺跡　分析結果

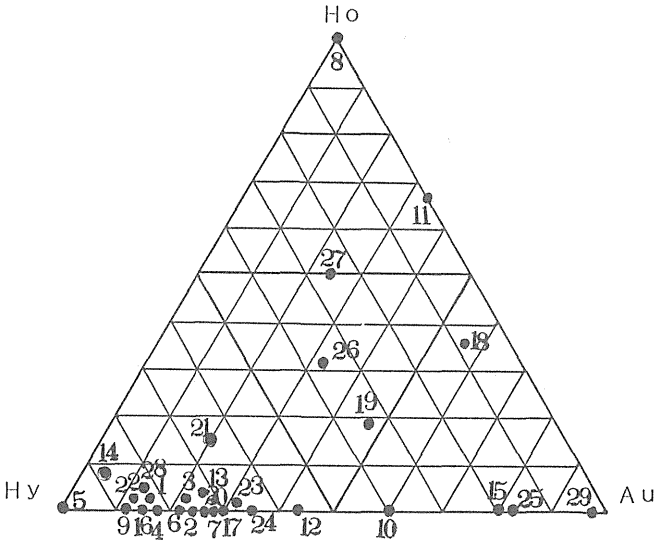

図３　安久遺跡　分析結果

細分すると、５世紀（和泉期）７個体（No.１～7）、６～７世紀（鬼高期）９個体（No.８～16）、８世紀７個体（No.17～23）、９世紀７個体（No.24～30）である。

各土器の鉱物組成の特徴を分かりやすくするために、土器から検出された重鉱物のうち、特徴的な３成分（角セン石、シソ輝石、普通輝石）を用いて三角ダイヤグラムを作製した。

Ｃ．安久遺跡の分析結果。（図３）

分析した土器試料は30個体で、時代は弥生時代中～後期４個体（No.１～4）、五領期13個体（No.5～17）、和泉期13個体（No.18～30）である。分析結果は三角ダイヤグラムに示した。

４．考　　察

土器は、およそ砂と粘土からできている。もし両成分の産地が違っていても、砂が作製地を示す可能性が高い（粘土産地は限定されるため、粘土が運ばれ、産地と土器作製地が一致するとは限らないが、砂はどこでも得られるので、土器作製地で混入されるものと思われる）。

そこで遺跡近辺の堆積物や、各地の砂粒鉱物を調べ、土器のそれと比較すれば、作製地を推定する事ができる。また、周辺遺跡の土器の鉱物組成について調べ、比較すれば、より一層正確に作製地を推定する事ができる。以下に、この二点についての資料をあげた後、考察を行う（なお、河川砂の砂粒試料については、作製地推定に直接利用したものだけを記載した）。

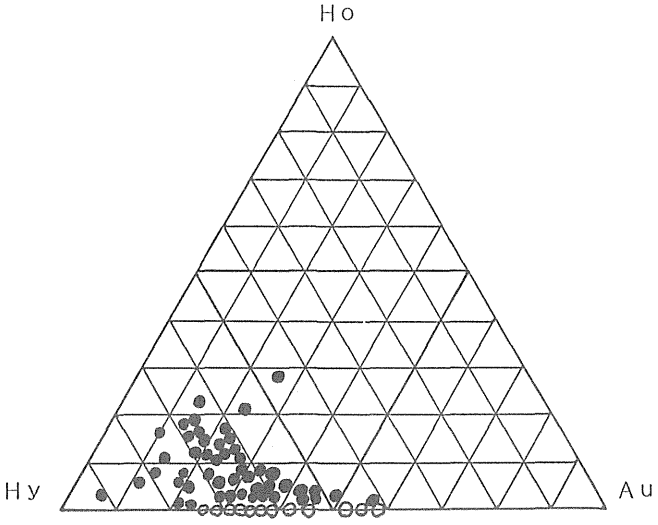

図４　沖積地資料　●印・狩野川系
○印・黄瀬川系

Ａ．比較資料について。

土器の作製地を推定するための比較資料は、遺跡

周辺の沖積地、及び同時代の土器を用いた。

ア）沖積地の資料について。（図４）

狩野川沖積地の資料は、現河床面、及び田方平野各所の沖積土を用いた（試料点数約 50）。その時代は、全て約 3000 年より新しいものである（カワゴ平パミス起源の鉱物を混入している事から）。

黄瀬川扇状地の資料 10 点は、黄瀬川と狩野川の合流点付近の各地で採集した（時代はやはり 3000 年より新しい）。

イ）土器資料について。

弥生時代の資料は、狩野川沖積地に面した遺跡（田方郡函南町の向原遺跡＝弥生時代中期、田方郡韮山町の山木遺跡＝後期）及び、直接狩野川に面した遺跡（駿東郡清水町の矢崎遺跡＝後期）のものを用いた。（図５）

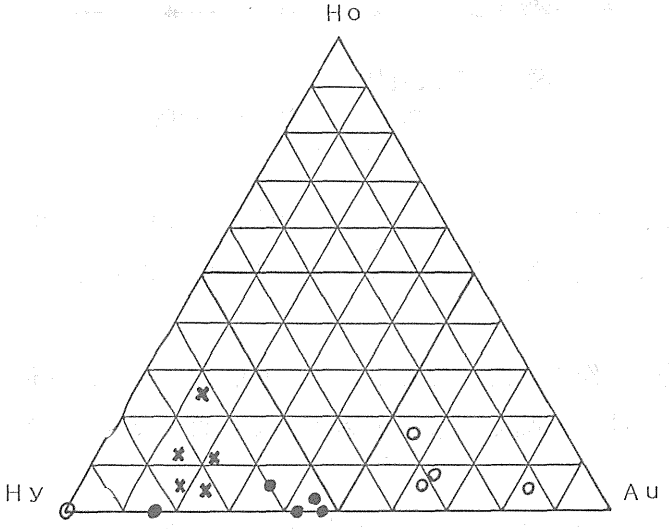

図５　弥生時代土器資料
×印・向原遺跡　○印・山木遺跡
●印・矢崎遺跡

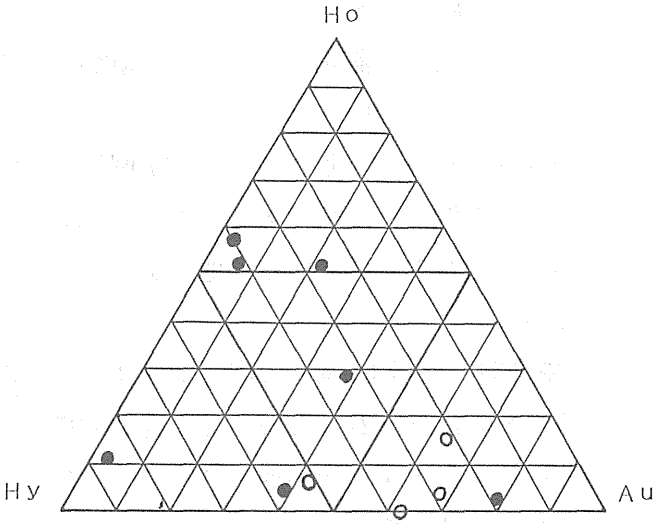

図６　古墳時代土器資料
○印・山木遺跡
●印・藤井原遺跡

古墳時代の資料は、前記した山木遺跡（五領期）、及び狩野川の河口近くの沼津市の藤井原遺跡（五領期）のものを用いた。（図６）

B．中島上舞台遺跡。（図７）

30 個体の土器のうち、18 個体にはカワゴ平パミス起源の鉱物が混入していた。また 17 個体は狩野川ないし黄瀬川の鉱物組成と酷似している。さらに 14 個体は山木遺跡の土器の鉱物組成と似ている。これらを総合すると、29 個体の土器は遺跡の近辺において（黄瀬川と狩野川両河川の砂が混じ

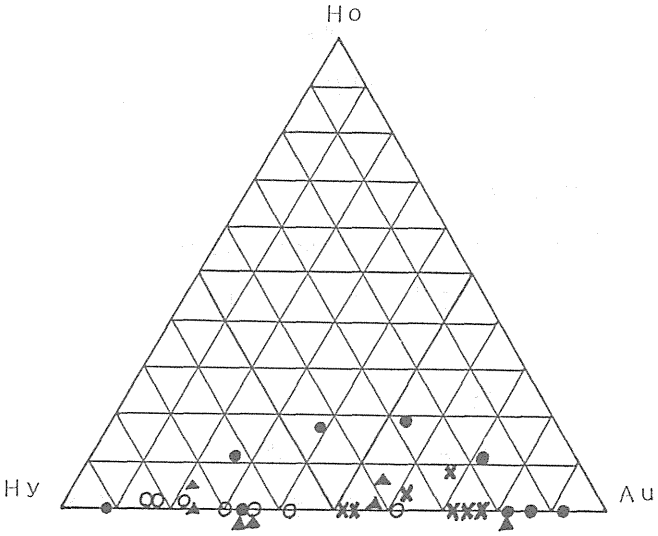

図７　中島上舞台遺跡
○印・和泉期　●印・鬼高期
▲印・８世紀　×印・９世紀

り合う。まさに遺跡の近辺）作製されたものと思われる。

なお、鉱物組成で普通輝石が多い土器が目立つが(山木遺跡の土器も同様な傾向がある)、これは原料の粘土に由来するものと思われる。

土器を時代別に見ると、時期ごとに鉱物組成が異なる、これは、各時期ごとに作製場所を変えていた事を示している。

なお、No. 27 の土器の作製地は、不明である。

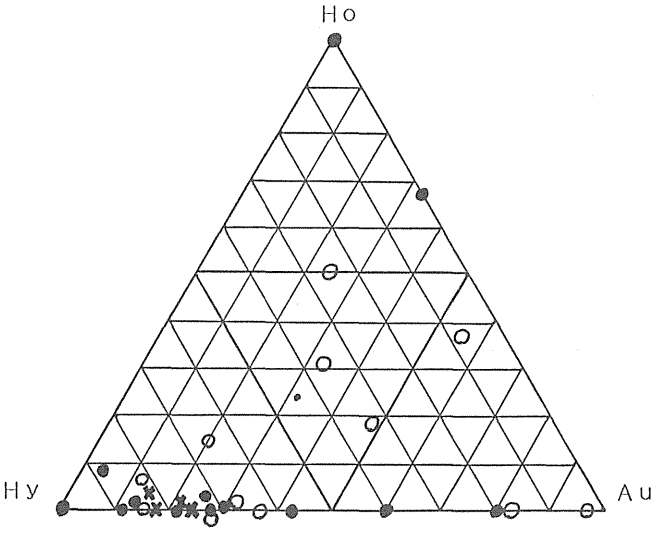

図8　安久遺跡
×印・弥生時代　●印・五領期
○印・和泉期

C．安久遺跡（図8）

ア）弥生時代の土器4個体は、全て遺跡の近辺の、同一地点で作られた様に思われる。

イ）五領期の土器13個体のうち、11個体は遺跡の近辺で作られた様である。1個体（No. 8）は、鉱物の特徴から見ると、静岡県西部地域の同時期の土器とよく似ている。他の1個体(No. 11)は胎土に殆ど砂粒を含まず、作製地の推定はできない。

ウ）和泉期の土器13個体の内、7個体は遺跡の近辺で作られた様である。他の6個体のうち、5個体（No. 18, 19, 21, 27, 29）は、他所で作られた可能性が強く、残る1個体（No. 30）は胎土に殆ど砂粒を含まず、作製地の推定はできない。

この時期の遺跡の近辺で作られたと思われる土器は、殆ど同一の場所で作製された様である。しかし一方で、他地域で作られた土器が多いのが特徴的である。これは、本遺跡が狩野川畔に極めて近く、外部との接触が容易だった為と思われる。この傾向は、狩野川河口付近にあった、藤井原遺跡の土器と似た傾向を示す事からもうかがえる。

時代別に見ると、本遺跡では、弥生時代から和泉期にかけて、遺跡近辺での土器作製地は殆ど変化していない。ただし時代がくだると、他地域からの土器の搬入が目立つ様になる。

5．終わりに

今回の報告は、説明等を非常に省略した、十分に納得していただけるか不安である。なお、土器および各種資料の提供、ご教示を、県内各地の市町の教育委員会の方々からいただいた、感謝の意を表します。

文　　献

増島　淳　(1977) 地質および土器の母材について
山木遺跡第4次調査報告書　韮山町

増島　淳　(1980) 土器に含まれている砂粒鉱物から見た弥生式土器の作製地について
沼津市歴史民俗資料館紀要4　沼津市